

オノマトペの語形成とレベル順序づけ

那 須 昭 夫

1. はじめに

本稿では、日本語オノマトペの形態音韻派生の機序について、生成音韻論の展開の中で提案された「レベル順序づけ (level ordering)」のモデルに基づいて考察する。

語形成現象の中には、形態的・音韻的に特徴の異なる要素が一定の順序関係を以て派生に参与する振る舞いが見いだされることがある。たとえば英語の派生接辞などはその代表的な一例である。英語の派生接辞には、語形成に伴って基体の強勢を移動させるもの(クラス I 接辞)と移動させないもの(クラス II 接辞)とがあり、前者は後者に先駆けて語形成を起こすことが知られている(Chomsky and Halle 1968; Siegel 1974, 1978; Allen 1978)。(1) の例に見るように、クラス I 接辞 *-ity* は基体の強勢を移動させる働きがあるが、クラス II 接辞 *-ly* にはそのような働きがない。また、クラス II 接辞はクラス I 接辞に外接する性質がある (=1b)。

- (1) a. original > original¹ity [[origin] -al]_I -ity]_I
b. original > original¹ly [[origin] -al]_I -ly]_{II}

日本語のオノマトペにも、英語接辞のクラス分けに類似した振る舞いを示す派生要素がある。「バタリ、バタン、バタッ」などの語形に含まれる語尾(接尾辞)と、「バタバタ」のような単純反復形に含まれる繰り返し要素(反復辞)がそれである。接尾辞(2a)は語形成に際して基体のアクセントを移動させるが、反復辞(2b)にはそのような働きがない。

- (2) a. ba'ta > bata'¹-ri (バタ'リ)
b. ba'ta > ba'ta-*bata* (バ'タバタ)

また、反復辞は接尾辞のついた派生形に外接する位置に現れる。たとえば「ドンドン、スイスイ、ザーザー」のような1音節の語根(CV語根)に由来する単純反復形では、CV語根に接尾辞のついた形式を対象として反復が起こる。

- (3) do+N > [do-N]+RED (ドンドン)
su+J > [su-i]+RED (スイスイ)
za+R > [za-a]+RED (ザーザー)

形態・音韻の両面にまたがるこれらの特徴は、オノマトペの接尾辞と反復辞の関係が英語のクラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞の關係に類似したものであることを示唆している。接尾辞はアクセント移動を起こす点で英語のクラスⅠ接辞と並行的な振る舞いを見せており、反復辞は接尾辞に外接する点で英語のクラスⅡ接辞に類似した特徴を見せる。

本稿では、上述の観察を足がかりとして、オノマトペの接尾辞と反復辞の間に見られる形態的・音韻的な性質の相違について検討し、語形成過程における両者の關係について考察する。まず第2節では、オノマトペの形態構造をめぐる従来の議論を検討し、先行研究に残された問題を指摘する。第3節ではオノマトペの接尾辞と反復辞の基本的な性質について概観するとともに、形態派生ならびにアクセント形成のあり方において両者が異なる特徴を持っていることを明らかにする。その考察を踏まえ、第4節では、オノマトペの形態音韻派生における接尾辞と反復辞の性質の違いを、レベル順序づけのモデルを通じて分析する。語形成部門に二つの順序づけられた派生の層があることを主張し、そのうち第一次層では接尾辞による派生が、第二次層では反復辞による派生が起こるとの分析を示す。

2. 先行研究

2.1 語形の分類

オノマトペの形態特徴を論じた従来の研究は、その多くが語形の分類に主眼を置いたもので占められている。語形分類の試みは古くは小林(1933)をはじめ、近年もなおその事例は枚挙にいとまがない(石垣1965; 天沼1974; 泉1976; Waida 1984; 大坪1989/2006; 南部1992; 田守・スコウラップ1999など)。

小林(1933)はオノマトペの語形を「集団的事実」と「散在的事実」とに大別し、より主要な群である前者に関して次の類型を挙げる。

(4) 集団的事実 (小林1933: 14-15)

A. 語基一音節

- a. 長音延長反覆 gêgê
- b. 撥音延長反覆 gangan
- c. 促音延長と附 ki'to

B. 語基二音節

- a. 非延長反覆 kirakira
- b. 撥音延長 katan
- c. 促音延長と附 pita'to

C. 語基二音節り延長

- a. 非延長 pitari
- b. 促音延長 pi'tari
- c. 撥音延長 mandiri

この分類では、形態派生の軸となる語基を音節数に基づいてまず大別し、それぞれのカテゴリーにおいて「反覆」および「延長」による派生形を挙げるという方針が採られている。「反覆」とは文字通り繰り返しの操作であり、「延長」は語尾要素の添加による派生操作を指す。

反復と語尾付加をオノマトペの語形成の中核的な操作と見るこうした観察は、表現の委細こそ論者により異なってはいるものの、その後の研究においても大方引き継がれていく。たとえば泉（1976）は日本語オノマトペの代表的な派生素素（および派生作用）として次の7種類を挙げている。

(5) 泉（1976）

- ・ ツメル音
- ・ ハネル音
- ・ 引ク音
- ・ リ音
- ・ 繰返し
- ・ 音の一部交替
- ・ 清濁音の対立

これらがオノマトペの形態派生を支える代表的な要素であることはほぼ異論のないところであろう。オノマトペの形態構造について細かな分類を試みた石垣（1965）においても、(5)に見る諸要素はオノマトペの派生を担う主要成分として扱われている。

泉（1976）の議論で目を引くのは、派生素素の類型を単に列挙するだけでなく、その組み合わせにも言及していることである。泉（1976: 132）はオノマトペの派生素素の組み合わせが「いかなる時にも、どのような形でも可能かと言うと、そうではない。この組み合わせ方にも規則性や制限がある点は大いに注目すべきことなのである」と述べ、派生素素の組み合わせに一定の秩序があることを指摘している。ただし、その具体的な中身については特に明示的な考察を加えているわけではなく、あくまでも派生素素の組み合わせ方に何らかの制限があることを示唆するに留まっている。

2.2 オノマトペ標識

派生素素の組み合わせという点に積極的に目を向けた形態分析の事例としては、Waida（1984）がある。Waida（1984）は「オノマトペ標識（onomatopoeia markers）」という独自の概念に基づいて派生素素の結合パターンを分析している。その主張によれば、オノマトペ標識（以下「標識」）とはオノマトペの形態の中に必ず現れる音韻的・形態的な特徴のことで、すべての適格なオノマトペは次に示す標識のうちいずれかのもを必ず含んでいなければならないとされる。（〔 〕内の名称は本稿筆者による。）

(6) オノマトペ標識

- a. MI : /' /, /ŋ / [促音、撥音]
b. MII : /:/ [長母音]
c. MIII : /ri/ [リ語尾]
d. MIV : Reduplicativeness [反復]

オノマトペの形態派生のあり方はその語形の多彩さに比して案外単純であり、有限個の派生要素を組み合わせることによって多様な語形を作り出すしくみが備わっている。Waida (1984) の主張はこうしたオノマトペの特質に目を向けたものである。論考末尾に付された資料 (Chart II, pp.71-74) には、日本語オノマトペに観察される標識の組み合わせが網羅されている。その中から数例を摘要すると、たとえば同じ標識MIを含む場合でも、その組み合わせのあり方 (位置) により異なるパターンが作り出される様子が次のように示されている。(語例の表記法はWaida (1984) に従う。「X、Y」は任意の自立モーラ。標識への下線は本稿筆者。)

- (7) a. X+MI+Y+MIII ka'chiri, bonyari
b. X+Y+MI doshi', doshiŋ

(7a) 「キッチリ、ボンヤリ」は標識MIを語中に含むパターンであり、(7b) 「ドシッ、ドシン」は同じ標識が語末に位置するパターンである。標識を用いた語構造分析には、限られた要素の組み合わせを通じて多彩な語形のバリエーションがもたらされるというオノマトペの本質的な特徴を捉えることができる点で、平準な語形分類にはない長所がある。

2.3 問題の所在

しかしながら、Waida (1984) の提案するオノマトペ標識の枠組みには不満の残る点もある。第一の問題は、実在する語形とそうでない語形とを区別できないことである。標識の組み合わせの中には、それが起こり得ても何ら不思議ではないのに、なぜか対応する実在形を欠くパターンがある。たとえば「ガッタン」というオノマトペは「X+MI+Y+MI」という標識構造で記述されるが (Waida 1984: 73)、これとまったく同じ構造を持つはずの「*ガッタッ」といった語形は起こらない。語構造を単に標識に置き換えて記述するWaida (1984) の分析では、こうした負例の実在をも過剰に予測してしまう。

この点に関連する問題として第二に指摘できるのは、適格でない標識の組み合わせに関する考察が十分になされていないことである。オノマトペ標識の組み合わせ方には、論理的には可能であっても実際の語形には現れないパターンがある。たとえば、これはWaida (1984) 自身も言及していることだが、日本語のオノマトペには1音節の語根を

単純に繰り返した次のような反復形は見られない。

(8) *ドド、*ポポ、*ググ、*パパ、*ササ、*スス

ところが、標識の枠組みを用いれば、このような適格でないパターンでさえも次のような形で語構造が記述できてしまう。

(9) X×MIV

Waida (1984) の主張によれば、オノマトペでは必ずいずれかの標識を伴っていることが適格な実在形であることを担保する要件であるはずである。しかるに (8) の語形は、反復標識MIVを伴っていてもなお適格でない。

言うまでもなく、(8) の語形が実在しない理由については、単に (9) のような標識の組み合わせがオノマトペにおいて許されていないと述べるだけでは説明されたことにはならない。(9) の組み合わせが起こり得ないのであれば、それが一体どのようなしくみを反映した事実なのかをまず問う必要がある。Waida (1984) の示す語構造分析は既存の適格形の観察のみに依拠して導き出されたものであり、その一方で、適格でないパターンに関しては十分な検討が及んでいない。最前の問いに答えるには、既存語の構造類型を個別に示すだけでは不十分で、負例の検討も含め、オノマトペの形態派生をもたらすしくみそのものの特性に光を当てる視点が必要である。

上述の問題意識に基づいて、本稿では以下、オノマトペの代表的な派生要素である接尾辞と反復辞の形態的・音韻的な性質の異同について検討し、両者がレキシコンにおいてどのような関わり合いのもとに語形成に参与しているか考察する。

3. 接尾辞と反復辞

3.1 オノマトペの接尾辞

日本語オノマトペには語尾要素を伴った派生形が豊富に見られる。小林 (1933) がオノマトペの形態分類の基準として語尾による「延長」の種別を設けて以降、オノマトペの語尾は多彩な形態のバリエーションをもたらす要素として従来々々関心を集めてきた。これまでのオノマトペ研究において指摘されてきた代表的な語尾要素には次のものがある (小林1933; 石垣1965; 天沼1974; 泉1976; Waida 1984; 南部1992; 田守・スコウラップ1999)。

- (10) a. 促音語尾 バタッ、ドキッ、グッ、ポッ
b. 撥音語尾 バタン、ドキン、グン、ボン
c. リ語尾 バタリ、ドキリ
d. イ語尾 グイ、ポイ

e. 長音語尾 ザー、グー

オノマトペの語尾は、その名が表すとおり形態論的には接尾辞の分類として位置づけることができる。石垣（1965）はオノマトペに現れる一連の語尾を「ツキ（affix）」と呼び、オノマトペでは語の中軸をなす形態にツキが結合することで多種多様な語形の派生が起こるとしている。同様に泉（1976: 125）もオノマトペの語尾について「一種の接辞のように用いられてヴァリエーションを作り出す要素」と述べている。オノマトペの語尾要素はいずれも基体に後接して（つまり接尾辞として）新たな派生形を作り出す性質がある。

- (11) a. CV + Af グッ、グン、グイ、グー
 b. CVCV + Af コロン、コロッ、コロリ

オノマトペの接尾辞としてどのような要素を認めるかという点については、論者により多様な主張がある。(10)の諸要素を挙げる研究が最も多いが、このほかにも「フックラ」などに現れるラ語尾を含める論もあれば（小林1933）、オノマトペ標識とそれ以外の接辞的要素を区別すべきとする主張もある（角岡2007）。またWaida（1984）のように、リ語尾（10c）とイ語尾（10d）との間に音韻脱落の過程を想定する主張もある¹。リ語尾とイ語尾はその出現環境が相互排他的であり、前者が2音節の語根につくのに対して後者は1音節の語根につく。現れ方に偏りがあるという点では長音語尾（10e）もその一例で、接尾辞として現れる場合には1音節語根のみに後接する性質がある²。

南部（1992）は、出現環境ならびに意味への関与のあり方に照らして、オノマトペの接尾辞には「準接尾辞」と「純接尾辞」の区別があるとす。前者には促音ならびに撥音が相当し、後者にはリ語尾があたる。たしかに促音・撥音とリ語尾とでは語形成のあり方においても次のような振る舞いの違いが見られる。促音および撥音は、より拡張的な形態を比較的自由に派生する性質があり、たとえば（12a）に見るような臨時的な語形を作りやすい。翻って、リ語尾（12b）はそうした拡張的な語形を作るプロセスには参与しない（那須2007）。

- (12) a. ガタガタ-ッ、ガタガタ-ン、ガタガタガタ-ッ、ガタガタガタ-ン、
 バササ-ッ、バサササ-ッ、チリリ-ン、チリリリ-ン
 b. *ガタガタ-リ、*ガタガタガタ-リ、*バササ-リ、*バサササ-リ

促音・撥音は辞典に掲載されない新造的な語形の構成素として働きやすい点で、造語力に富む接尾辞と言える。片やり語尾は、従来しばしば指摘されるように、より語彙化の進んだ形態に含まれることの多い接尾辞であり（渡邊1952; 筧1993）、その分布は辞書項目として安定した既存語（より文章語的な性格の色濃い語）において目立つ（渡邊

1952; 田守・スコウラップ1999; 那須2007)³。

3.2 反復形態法の解釈

接尾辞による派生と並んで、繰り返しによる語形成も日本語オノマトペの代表的な形態法のひとつである。角岡 (2007: 6-7) によれば、Kakehi, Tamori, and Schourup (1996) に含まれる1652項目の見出し語のうち、「ピカピカ」のような単純反復形は696語を占めるといふ。また玉村 (1989) も、「ABAB型」の反復語がオノマトペ全体の約4割 (42.86%) に上ることを、『分類語彙表』(国研1964) の記述に基づいて報告している。

反復形態法の解釈には、これを同一形態素の組み合わせからなる複合の一種とみなす見解と、反復接辞を介した派生形態法の一つと捉える見解とがある。前者の論としては、たとえば阪倉 (1966: 13) の「同一の単語 (または、これに準ずる言語単位) を二つ結合させる特殊な複合法」との説明が挙げられる。一方、後者の論としては、反復語の繰り返し部分にあたる形態を一種の過程形態素 (process morpheme) と見る Hockett (1950) などの分析が知られている⁴。この二通りの考え方のうち、本稿では後者の見解に基づいて考察を進める。

反復形態法に見られる特有の個性を挙げるとするならば、それは、繰り返される形式の構造が基体の構造から十分に予測できることにほかならない。Hockett (1950) は反復語の繰り返し部分に当たる形態を“chameleon”と呼んでいるが、この隠喩的な呼称は、基体のコピーを作り出す操作としての反復形態法の性格を的確に言い当てたものとして秀逸である。反復とは、基体を複写することで得られる接辞 (反復辞reduplicant) を基体に付加する再帰的な形態法であり、その過程において、反復辞はまさしくカメレオンのごとく個々の基体の構造に応じた形式をとって現れる。

反復を過程形態素的な接辞による形態法と捉える見解は、韻律形態論 (Prosodic Morphology) および最適性理論 (Optimality Theory) においても長らく採られてきた考え方である。反復辞は固有の音形が指定されていない抽象的な形態素であり、その具体的な形態の姿は、もっぱら基体の音韻構造を複写する過程を通じて決まる。一例としてイロカノ語 (Ilokano) の部分反復現象を見る (McCarthy and Prince 1996: 3-4)。

(13) /RED + basa/	ag- <u>bas</u> -basa	'be reading'
/RED + adal/	ag- <u>ad</u> -adal	'be studying'
/RED + takder/	ag- <u>tak</u> -takder	'be standing'
/RED + trabaho/	ag- <u>trab</u> -trabaho	'be working'

イロカノ語の部分反復では、重音節に相当する分節の連鎖を基体の左端から複写することで反復辞 (RED) が作られ、それを基体の左端に付加することで語形成が完了する。反復辞の具体的な音形は重音節の鋳型 (template) に基体の分節を写像することで定まるため、{bas-, ad-, tak-, trab-} といった個別の形式を逐一レキシコンに登録しておく

必要はない。この考え方は言語の経済性という点に照らしても優れている。反復辞が重音節からなることを指定しておきさえすれば、その具体的な形式は基体の音韻構造から十分に予測できるからである。

上述のイロカノ語の事例と類似のしくみは、日本語オノマトペの反復現象にも見いだされる。たとえば「クルルン、チリリン、バササッ、シュルルッ」といった部分反復オノマトペでは、基体「クルン、チリン、バサッ、シュルッ」の末尾に最も近い位置にある軽音節を複写することで反復辞が形成される（那須2010）。

- (14) /kuru-RED-N/ kuru-ru-N (クルルン)
 /tiri-RED-N/ tiri-ri-N (チリリン)
 /basa-RED-Q/ basa-sa-Q (バササッ)
 /syuru-RED-Q/ syuru-ru-Q (シュルルッ)

ここで繰り返しの対象となっている {ru, ri, sa} などの形式は、個々にレキシコンに登録されるべき語彙項目なのではなく、軽音節からなる鋳型に基体の音韻構造を複写することで得られる派生的な要素である。オノマトペの反復現象が接辞を介した派生形態法の一つであることは、こうした現象の存在を通じて裏づけることができる。反復語に備わる「繰り返し」という振る舞いは一見したところ風変りなプロセスのようにも思われるが、基体を複写して作られた形式を接辞として付加するパターンであると考えことで、他の一般の接辞付加型の派生形態法と同様の位置づけを与えることができる。

3.3 基体のレベル

接尾辞と反復辞の形態面における特徴の違いは、それぞれの付加対象となる形式（基体、base）の性質に見いだされる。

まず接尾辞は、「グ」「バタ」といった非派生の形式に結合して「グン、グッ、グイ」「バタン、バタッ、バタリ」のような派生語（以下「接辞付加形」）を作り出す。接尾辞の結合対象となる「グ」「バタ」などの形式は、語から全ての派生素素を取り除いた後に残る最小の形態単位であることから（Bauer 1983: 20-21）、いわゆる語根（root）に相当する形態であると言える。オノマトペの語根にはCV形式からなるもの（1音節語根）とCVCV形式からなるもの（2音節語根）の二通りのタイプがあるが、これらはいずれも等しく接尾辞付加の基体として働く。

- (15) a. 1音節語根 (CV+Af) b. 2音節語根 (CVCV+Af)
 do+N (ドン) bata+N (バタン)
 pa+Q (パッ) pika+Q (ピカッ)
 po+J (ポイ) toro+ri (トロリ)
 za+R (ザー)

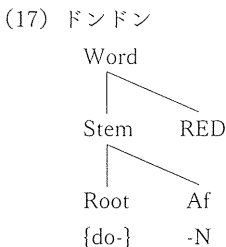
オノマトペの語根は拘束形であり、それ自身では自立した語として働きにくい性質がある(石垣1965; 天沼1974; 泉1976; 田守・スコウラップ1999)。たとえば「(火が) ボと燃える」「(液体が) ドロと流れる」といった語根単独の形式は不安定で、通常は「ボッと」「ドロッと」のように必ず何らかの接尾辞を伴った形で用いられる(石垣1964; Waida 1984; 田守・スコウラップ1999)。

接尾辞が語根をそのまま基体としてとれるのに対して、反復辞の場合は語根に直接結合できないことがある。問題となるのはCV構造からなる1音節語根で、(16a)に示すように、1音節語根をそのまま繰り返した反復形は適格でない。

- | | |
|-----------------|-------------------------------|
| (16) a. *CV+RED | b. [CV+Af]+RED |
| *do+RED (*ドド) | [do-N]+RED (ドンドン) |
| *gu+RED (*ググ) | [gu-J]+RED (グイグイ) |
| *sa+RED (*ササ) | [sa-Q]+RED (サッサ) ⁵ |
| *za+RED (*ザザ) | [za-R]+RED (ザーザー) |

1音節語根から単純反復オノマトペが作られる際には、(16b)に見るように、語根に接尾辞のついた形態が繰り返しの対象となる。この事実から、反復辞は語根を直接基体としてとることができず、接尾辞を伴った語幹(stem)レベルの形態を基体として語形成を起こす性質があることが分かる。

派生素素の結合対象をめぐる上述の相違は、接尾辞と反復辞との間に派生上の順序づけが成り立っていることを、すなわち、接尾辞付加が反復の過程に先駆けて起こることを示唆している。「ドンドン」というオノマトペを例に階層図を用いてこの様子を示したのが(17)である。



(17)は、接尾辞が語根を対象に派生を起こす要素として位置づけられるのに対して、反復辞は語幹レベルの形態の姉妹位置において語形成を起こすことを示している。接尾辞と反復辞とでは形態派生を起こす階層に違いがあり、前者がより深い層で語形成を起こす一次的な派生素素である一方で、後者はより浅い層で語形成に参与する二次的な派生素素であると考えられる。

3.4 韻律最小性

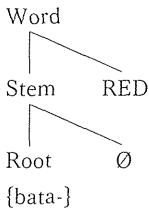
ところで、上述の分析で一つ問題として残るのは、2音節語根に由来する単純反復形の解釈である。2音節語根由来の形式では、(18)に示すように、接尾辞を伴うことなく単純反復形が作られる。したがって見かけの上では反復辞が語根に直接結合していると解釈できてしまうわけだが、この解釈は、反復が（語根ではなく）語幹レベルの形態に作用すると考える最前の分析と整合しない。

(18) CVCV +RED

bata +RED (バタバタ)
zabu +RED (ザブザブ)
pika +RED (ピカピカ)
doki +RED (ドキドキ)
toro +RED (トロトロ)

しかしながら、この問題については次のような分析をとることで整合性のある説明が可能である。(19)に示すように、2音節語根は接尾辞を伴わないまま語幹に昇格して反復辞付加の基体として働くと考えられる。(∅は該当する要素がないことを示す。)

(19) バタバタ



可視的な派生要素を介さないゼロ派生を想定する分析(19)は、一見形式的なきらいはあるものの、この分析の動機および妥当性については、Itô (1990)の明らかにした語幹の韻律最小性(Minimal Stem Requirement)という概念を通じて説明することができる。

(20) Minimal Stem Requirement (Itô 1990)

$$\text{Min (STEM)} = F_{\mu\mu}$$

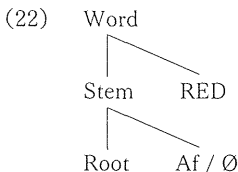
この条件は、語幹が最小でも2モーラ1フットのサイズを満たさなければ適格な派生形として成立しないことを示したもので、短縮語形成をはじめとする日本語の種々の韻律語形成現象の分析(Poser 1990; Itô 1990)に基づいて一般化されたものである⁶。この

条件がオノマトペにおいても機能していることについては、Hamano (1998) が次の議論を通じて明らかにしている。(16) に見たように、1音節のオノマトペ語根は接尾辞による派生を受けないと反復の基体として働くことができないが、Hamano (1998) はこれを最小性条件 (20) の効果の表れであるとしている。すなわち「ド、グ、サ、ザ」のような1音節語根は (20) に照らして過小の構造であるがゆえに接尾辞付加が必須であり (=21a)、その結果、2モーラ1フットからなるサイズが保証されるというわけである (=21b)。

- (21) a. *gu < F_{μμ}
 b. gu-N, gu-Q, gu-i, gu-u = F_{μμ}

翻って「バタ、ザブ、ピカ、ドキ、トロ」などの2音節語根は、その形式自体ですでに最小性条件 (20) を満たす。つまり2音節のオノマトペ語根が接尾辞を伴わずにそのまま語幹に昇格できるのは、語幹に求められる最小の韻律サイズを元来備えているからにほかならない。

Itô (1990) および Hamano (1998) らによる上述の議論に基づくと、ゼロ派生分析 (19) の妥当性を訴えることができる。この分析の利点は、言うまでもなく、オノマトペにおける反復語形成の機序を語根の音節数を問わず次のような一律のモデルで捉えられるところにある。



1音節語根由来の形式であろうと2音節語根由来の形式であろうと、反復辞は語幹に対して結合する。語根が語幹に昇格する際に接尾辞が必要とされるか否か (Af / Ø) は、もっぱら語幹の韻律最小性条件 (20) によって制御される選択肢である。この分析に基づく、Waida (1984) において説明のつかないまま残されていた問題、すなわち、CV形式を直接反復した形が派生されないことの理由についても合理的な説明を与えることができる。「*ドド」のような*CV-CV型の単純反復が許されないのは、「ド」が反復の基体たる語幹の韻律最小性を満たさないからにほかならない。

3.5 アクセント

接尾辞と反復辞の特性の違いは、その音韻的振る舞いからも見いだされる。両者はとりわけアクセント形成のあり方において顕著に対極的な特徴の違いを見せる。秋永

(2001)によれば、接辞付加形および単純反復形のアクセントはそれぞれ次のように記述されている。

(23) a. 接辞付加形

ワ'ッ (と)、カ'ッ (と) デ'ン (と)、ポ'ン (と)、チョ'ン (と)、ト'ン (と)、
ド'ン (と)、プ'イ (と)、チョ'ー (と)
カラ'ッ (と)、チラ'ッ (と)、ピリ'ッ (と)、ケロ'ッ (と) ガタ'ン (と)、
プツ'ン (と)、ゴト'ン (と)、ニコ'リ (と)、ヒヤ'リ (と)、ピリ'リ (と)、
フラ'リ (と)、ゴロ'リ (と)

b. 単純反復形

ポ'ンポ'ン、ガ'ンガ'ン、ス'イスイ、グ'イグイ、ザ'ーザ'ー、シュ'ーシュー
キ'ラキラ、ガ'ラガラ、グ'ルグル、チ'ラチラ、フ'ワフワ、ボ'キボキ

接辞付加形 (23a) ではアクセントが語根の最終音節に置かれる。このパターンは語の最終フットの主要部にアクセント核を含む型であるとも言える。他方、単純反復形 (23b) では語頭の音節にアクセントが置かれるのが特徴である。これは語頭のフットの主要部に核を含むパターンであるとも言い得る。つまり接辞付加形と単純反復形とはアクセント核の所在が正反対であり、その韻律構造も鏡に映し出したように対極的なパターンを示す。(丸括弧は有核フット)

(24) a. 接辞付加形: …F'

(po'N) ポ'ン
(ka'Q) カ'ッ
(pu'i) プ'イ
(za'a) ザ'ー
go (to'N) ゴト'ン
ti (ra'Q) チラ'ッ
ni (ko'ri) ニコ'リ

b. 単純反復形: [F'…

(po'N) poN ポ'ンポ'ン
(su'i) sui ス'イスイ
(za'a) zaa ザ'ーザ'ー
(sa'Q) sa サ'ッサ
(ki'ra) kira キ'ラキラ
(ga'ra) gara ガ'ラガラ
(gu'ru) guru グ'ルグル

接辞付加形 (24a) のプロソディは、語末に有核フットを含む主要部末端型の構造をとる。対して単純反復形 (24b) は、有核フットを語頭を含む主要部始端型の韻律構造を持つ。

アクセントに見る第二の違いは、形態派生に伴う核移動の有無である。まず接尾辞には、基体に結合する際にアクセント核の位置を移動させる性質がある。基体の第一音節にあったアクセント核は接尾辞がつくとその直前の音節に移動する⁷。

- (25) ba'ta > bata'-Q (バタ'ッ)
 ga'ta > gata'-N (ガタ'ン)
 pi'ka > pika'-ri (ピカ'リ)

一方、反復辞にはこうしたアクセント移動をもたらす働きがない。反復が起きても基体のアクセントは一切影響を受けず、核はもとの語頭音節に留まる。

- (26) ba'ta > ba'ta-bata (バ'タバタ)
 ga'ta > ga'ta-gata (ガ'タガタ)
 pi'ka > pi'ka-pika (ピ'カピカ)

この振る舞いの違いから、接尾辞が音韻的に活性化形態素であるのに対して、反復辞は音韻的に不活性化形態素であることが分かる。

4. 形態音韻派生の機序

4.1 派生要素のクラス分け

前節で見たように、接尾辞と反復辞とともにオノマトペの代表的な形態派生要素でありながらも、その言語的振る舞いは形態・音韻の両面にわたって互いに特徴を異にする。まず形態面の振る舞いに関しては、接尾辞が拘束的な語根を対象に一次的な語形成を起こすのに対して、反復辞は語幹レベルの形態を基体としてとる性質がある。接尾辞と反復辞との間には形態派生上の順序関係が成り立っており、反復辞は接尾辞のついた派生形に外接する位置に現れるのが特徴である (=16b)。また音韻面の振る舞いについては、語形成に伴ってアクセントに影響を与えるか否かという点が両者の際立った相違として特筆できる。接尾辞には基体のアクセントを変える性質があるが (=25)、反復辞にはそのような性質が見られない (=26)。

興味深いことに、派生要素間でのこのような振る舞いの違いは英語の派生接辞においても見られる。英語の派生接辞は、その形態的・音韻的な振る舞いの違いに基づいて、「クラス I 接辞」と呼ばれる群 (27a) と「クラス II 接辞」と呼ばれる群 (27b) とに分けられることが知られている (Chomsky and Halle 1986; Siegel 1974, 1978; Allen 1978)。

- | | |
|------------------|-------------------|
| (27) a. クラス I 接辞 | b. クラス II 接辞 |
| -al local | -ly originally |
| -ity probity | -ment arrangement |
| -ic heroic | -hood parenthood |
| -ion friction | -ful beautiful |
| -ify personify | -ness kindness |

クラス I 接辞は、“local, probity, friction” といった例に見るように、拘束的な形態と緊密に結びついて一語をなすことができる⁸。一方、クラス II 接辞はその基体として常に自立的な形態をとる性質がある。すなわち、クラス I 接辞のほうがクラス II 接辞に比べ、より小さなレベルの形態（拘束形）を対象に語形成を起こす性質があり、この点はオノマトペの接尾辞とよく似ている。また、クラス II 接辞は常にクラス I 接辞に外接する位置に現れるという特徴がある。外接構造を持つ（28a）は適格な派生形であるが、クラス II 接辞がクラス I 接辞の内側に生じる（28b）は適格でない⁹。

- (28) a. courageously [[[[courage]-ous]_I]-ly]_{II}
 b. *eventlessness *[[[[event]-less]_{II}]-ity]_I

クラス I 接辞とクラス II 接辞の最も顕著な性質の違いは、強勢現象の中に見いだされる。英語のクラス I 接辞は語形成に伴って基体の強勢を移動させるが、クラス II 接辞にはそのような働きがない（Chomsky and Halle 1968）。

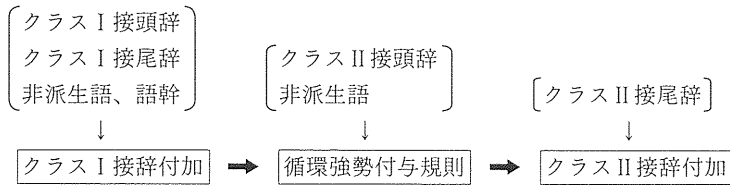
- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| (29) a. クラス I 接辞 | b. クラス II 接辞 |
| párent parént- <i>al</i> | párent párent- <i>hood</i> |
| pérsón persón- <i>ify</i> | kínd kínd- <i>ly</i> |
| eléctric electríc- <i>ity</i> | háppy háppi- <i>ness</i> |
| héro heró- <i>ic</i> | arránge arrángo- <i>ment</i> |
| explóre explor- <i>ation</i> | beáuty beáuti- <i>ful</i> |
| músic music- <i>ian</i> | hárm hárm- <i>less</i> |

クラス I 接辞（29a）が強勢の移動をもたらす点は、同じくアクセント移動をもたらすオノマトペの接尾辞の音韻的振る舞い（25）と軌を一にする。他方、クラス II 接辞（29b）が音韻的に不活性な性格を示す点は、オノマトペの反復辞の音韻的振る舞い（26）にも同様に見いだされる特徴である。

4.2 レベル順序づけ

上に紹介した英語接辞におけるクラス分けの事実は、「レベル順序づけ仮説（Level Ordering Hypothesis）」または「接辞順序づけの一般化（Affix Ordering Generalization）」と呼ばれる理論的主張の根拠となったことで名高い（Siegel 1974, 1978; Allen 1978）¹⁰。その主張の核心は、形態派生と音韻派生とが互いに順序づけられた関係をなして語形成部門を構成している点にある。英語のレキシコンの構成を扱った Siegel（1974, 1978）による順序づけのモデルを示す。

(30) 英語レキシコンでのレベル順序づけ



このモデルでは、クラス I 接辞とクラス II 接辞がレキシコンにおいて異なる層に分属しているとされ、前者が後者に先駆けて語形成を起こすとの順序関係が示されている。このモデルで特筆すべきは、一連の形態派生の順序づけの中に音韻規則の適用過程が組み込まれていることである。「循環強勢付与規則」はクラス I 接辞付加の直後に作用すると考えられており、この順序づけがあることで、クラス I 接辞とクラス II 接辞とでの強勢付与のあり方の違いが次のように説明される。

(31) *paréntal* / *párenthood*

	(a)	(b)
非派生形 (入力)	parent	parent
クラス I 接辞付加	parent + <i>al</i>	————
循環強勢付与規則	par.ént.al.	pár.ent.
クラス II 接辞付加	————	párent + <i>hood</i>
出力	paréntal	párenthood

クラス I 接辞が関わる派生過程 (31a) では、まず接辞-*al*の付加が起こり、続いて派生語全体に対して循環強勢付与規則が適用されることで強勢の移動したパターン (*parent* > *paréntal*) が作られる。他方、クラス II 接辞による派生過程 (31b) では、接辞-*hood*の付加に先駆けて循環強勢付与規則の適用が済んでしまうため、強勢の移動は起こらない (*párenthood*)。

日本語の形態音韻現象に関しても、こうした順序づけのモデルが合理的な説明を導くことを示す事例として、動詞アクセント形成に関するKitagawa (1986) の分析がある。次に示すように、3 モーラ以上の母音語幹動詞では現在形と過去形とでアクセントの位置が異なる。現在形 (32a) ではアクセントが語幹末尾のモーラに置かれるのに対して、過去形 (32b) では語幹の次末モーラに置かれる。

- (32) a. 現在形 たべ'-る、おき'-る、しらべ'-る、たすけ'-る、ながれ'-る
 b. 過去形 たべ-た、おき-た、しらべ-た、たすけ-た、ながれ-た

Kitagawa (1986) は、この非対称性が現在接辞-*ru*と過去接辞-*ta*の語形成レベルの違い

によってもたらされるものであるとし、前者が第一の層 (Level *i*) で語形成を起こす一方で、後者は続く第二の層 (Level *j*) で語形成を起こすとの分析を紹介している。

(33) たべ'る / た'べた

	(a)	(b)
入力 (動詞語幹)	tabe-	tabe-
Level <i>i</i> - <i>ru</i> 付加	tabe + <i>ru</i>	————
アクセント規則 ¹¹	ta-be'-ru	ta'-be
Level <i>j</i> - <i>ta</i> 付加	————	ta'be + <i>ta</i>
出力	tabe'ru	ta'beta

動詞「食べる」の現在形 (33a) では、Level *i*において接辞-*ru*が付加された形態にアクセント付与規則が適用されることで次末モーラ「べ」への核付与が起こる。他方、過去形の派生 (33b) ではLevel *i*のアクセント規則が語幹tabe-に対して直接適用されるため、この形式にとっての次末モーラ「た」に核が付与される。また、過去接辞-*ta*はアクセント規則の適用が済んだLevel *j*の段階で付加されるので、過去形が作られてもアクセントの位置は影響を受けない。この分析で重要なのは、現在接辞-*ru*による派生が過去接辞-*ta*による派生に先行して順序づけられている点と、この二つの形態派生過程の間にアクセント付与規則が位置づけられている点である。現在形と過去形でのアクセント位置のずれは、この順序づけが設けられていることで適切に説明される。

4.3 オノマトベの派生と順序づけ

レベル順序づけのモデルは、オノマトベの形態音韻派生の事実を捉えるうえでも有効である。4.1節で触れたように、日本語オノマトベの接尾辞と反復辞との間には、英語のクラス I 接辞とクラス II 接辞の間に見られるものとよく似た関係が見出される。まず接尾辞は、拘束的な語根を対象に語形成を起こすことと、語形成に伴ってアクセント移動を起こす点で、英語のクラス I 接辞に似る。また反復辞は、語幹レベルの形態を派生の基体としてとることと、形態派生に際してアクセント移動をもたらさない点において、英語のクラス II 接辞によく似た性質を示す。これらの特徴を踏まえると、オノマトベに関しては次のようなレベル順序づけを主張することができる。

- (34) a. Level *i*: 接尾辞付加規則 > アクセント付与規則
 b. Level *j*: 反復辞付加規則

接尾辞と反復辞はそれぞれ一次的な派生レベル (Level *i*) と二次的な派生レベル (Level *j*) とに分属しており、前者が後者に先駆けて語形成を起こす関係にある。また、この二つの形態派生の間には次のアクセント付与規則が介在する。(丸括弧はフット、#は

語末)

(35) $\mu \rightarrow \mu' / (_ \mu) \#$ (語末フットの主要部にアクセントを与えよ)

(24a) に見たように、接尾辞は語形成に伴って語末型のアクセントを作り出すが、このパターンは語の最終フットの主要部にアクセント核を付与することで得られる。数例を再掲する。

- (36) a. (po'N)# ポ'ン
 b. go (to'N)# ゴト'ン
 c. ti (ra'Q)# チラ'ッ
 d. ni (ko'ri)# ニコ'リ

1 音節語根由来の形式 (36a) では接辞付加形全体が一つのフットを構成し、その主要部/po/への核付与がなされる。2 音節語根由来の形式のうち特殊モーラが接尾辞として現れるパターン (36b,c) では、特殊モーラを含む重音節が語末フットを構成し、その主要部/to, ra/にアクセントが与えられる。リ語尾を伴う語形 (36d) では、語末に生じる軽音節連鎖がフットを構成し、その主要部/ko/がアクセント核となる¹²。

ここで重要なのは、このアクセント規則 (35) が一次的な派生レベル (Level *i*) に順序づけられている点である。このことは、反復派生が起こる前にアクセント規則の適用が済んでしまうことを意味しているが、この順序づけが保証されていることによって、アクセント形成をめぐる接尾辞と反復辞の振る舞いの違い (25) (26) が次のように適切に捉えられる。

(37) バタ'ン / バ'タバタ

		(a)	(b)
	入 力	bata-	bata-
Level <i>i</i>	接尾辞付加	bata + N	————
	アクセント規則 (35)	ba (ta'N)#	(ba'ta)#
Level <i>j</i>	反復辞付加	————	ba'ta + RED
	出 力	bata'N	ba'ta-bata

接辞付加形の派生過程 (37a) では、接尾辞の付加された形式における語末フット (taN) にアクセントが与えられることにより、「バタ'ン」という語末型のパターンが作られる。一方、単純反復形の派生過程 (37b) では接辞付加規則が働かないため、初期入力と同形の/bata/がアクセント規則の入力形となる。この形式はそれ自身でフット (bata) を構成し、その主要部である初頭音節/ba/にアクセントが与えられる。アクセントを与

えられた形式「バタ」はその後反復を受けるが、その際にアクセントに影響が出ることはない。これは、反復の過程がアクセント付与規則の適用が済んだ後に順序づけられているからにほかならない。

上述の順序づけは、1音節語根に由来するオノマトペの派生についても合理的な説明を与えることができる。接辞付加形「ポン」と単純反復形「ポンポン」を例にその様子を示す。

(38) ポン／ポンポン

		(a)	(b)
	入 力	po-	po-
Level <i>i</i>	接尾辞付加	po + N	po + N
	アクセント規則 (35)	(po'N)#	(po'N)#
Level <i>j</i>	反復辞付加	————	po'N + RED
	出 力	po'N	po'N-poN

1音節語根po-から始発する派生では、Level *i*において接尾辞付加が義務的に起こることにより、2モーラ1フットからなる形式/po-N/が作られる。この形式はアクセント付与規則 (35) の構造記述を満たすので、規則通りアクセントが与えられる。アクセント付与がなされた形式は (38a) のようにそのまま語として出力されてもよいし、(38b) のようにLevel *j*で反復派生を受けてもよい。後者の場合、アクセント付与規則がすでに適用されているので、反復派生が起きてもアクセントの移動は起こらない。

4.4 順序づけ分析の利点

(34) のレベル順序づけに基づく分析には、接辞付加形および単純反復形の形態音韻派生の事実を十分に捉えられることに加え、さらにいくつかの利点がある。

第一に、複数の接尾辞を伴った多重派生形のアクセントを適切に予測できることが挙げられる。オノマトペの中には、リ語尾を伴った派生形の外側にさらに別の接尾辞がついた「コロ-リン」「コロ-リ-ッ」といった語形があるが、これらの語形のアクセントは次のような語末型のパターンをとる (秋永2001: 63)。

(39) コロリン、ブラリン、ツルリン、キラリッ、ピリリッ、ゴロリッ

このアクセントは、基体として働くり語尾形「コロリ、ブラリ、ツルリ、キラリ、ピリリ、ゴロリ」からアクセント核がさらに1モーラ分右側に移動したパターンであると言えるが、このようなアクセント移動の事実は、Level *i*に含まれる形態規則とアクセント規則が循環的に適用されると考えることで適切に説明できる。

(40) コロリン

	入 力	koro-
Level <i>i</i>	接尾辞付加 1	koro + ri
	アクセント規則 1	ko (ro'ri) #
	接尾辞付加 2	koro'ri + N
	アクセント規則 2	koro (ri'N) #
	出 力	korori'N

同一のレベルに属する一連の形態音韻規則は、そのレベルで起こる派生が済むまで繰り返して適用される性質がある（規則の循環適用）。上の例ではまず第一回目の循環（cycle）において「コロ'リ」という接辞付加形が形成され、引き続き第二回目の循環が起こることによって多重派生形「コロリン」が形成される。

第二の利点は、「*ドド」のような不適格な反復オノマトペが現れない理由を理論的に説明できることである。(16a)に見たように、オノマトペでは1音節語根を単純に繰り返した「*CV+RED」型の反復形が起こらない。この点については、すでに2.3節において、Waida (1984) による「オノマトペ標識」のモデルがこの種のパターンが起こらない理由を十分に説明できないことを指摘したが、(34)のレベル順序づけに基づくとき、その理由を以下のように合理的に説明できる。（「*****」は規則が適用不能であることを示す。）

(41) *ドド

	入 力	do-
Level <i>i</i>	接尾辞付加	——
	アクセント規則 (35)	***** (*do-)
Level <i>j</i>	反復辞付加	*****
	出 力	∅

「*ドド」は接尾辞を一切含まない形であることから、言うまでもなくLevel *i*における接辞付加規則は働かない。ここで重要なのは、語根do-に接尾辞付加規則が適用されないまま派生が進むと、アクセント付与規則 (35) の構造記述が得られないことである。すなわち*doという形式だけでは2モーラからなる語末フットを作ることができないので、アクセント付与規則 (35) が稼働できず、その段階で派生が停止してしまう。(37)(38)に示した一連の適格形の分析に見るように、派生がLevel *i*からLevel *j*に進行するためには必ずアクセント付与規則 (35) が適用されなければならない。ところが(41)の派生では、中間表示*do-にアクセント付与がなされないため、Level *i*を脱出することができず、結果として反復派生も受けることができない。1音節語根を直接反復した「*ドド」のような語形がオノマトペに見られないことは、このエラーに起因する事象と

して説明できる。

5. おわりに

本稿では、オノマトペの主要な派生要素である接尾辞と反復辞に注目し、形態音韻派生における両者の性格の違いについて考察した。前者は語根レベルの形態を基体とし、その派生過程においてアクセントに影響を与える（語末型のアクセントを形成する）性質がある。他方、後者は語幹レベルの基体に作用し、アクセントに影響を与えることがない。

接尾辞と反復辞に見る上述の相違について、本稿ではレベル順序づけのモデル（34）に基づく分析を示した。接尾辞付加ならびにアクセント付与規則はレキシコンの第一次層（Level *i*）に属する過程であり、他方、反復辞による派生は第二次層（Level *j*）において働く。接尾辞がアクセントに影響を与える一方で反復辞が音韻的に不活性な振る舞いを見せるのは、アクセント付与規則（35）が第二次層での反復派生に先駆けて適用されることによる。

オノマトペの形態をめぐる従来の研究では、多様な語形をその構造に従って平準に分類する分析が主流であった。一方、本稿では、語形成部門における派生要素間の相互関係に着目し、レベル順序づけのモデルを援用することで、従来分析の及んでいなかった事実、すなわち接尾辞と反復辞の形態的・音韻的な性質の違いについて、合理的な説明が与えられることを示した。

付記 本稿は、科学研究費（基盤研究（C）、26370437）による助成を受けた研究の成果の一部をまとめたものである。

注

1. Waida (1984: 70) は、リ語尾から子音/r/が脱落することでイ語尾が作られるとの分析を示している。
2. 2音節語根由来のオノマトペでも「ゴローッ」「ゴローン」のように長音を含むものがあるが、この場合の長音は接尾辞というよりも、「ゴロッ、ゴロン」のようなすでに接尾辞を伴った形に対して加えられる挿入要素と解される。
3. 渡邊 (1952: 39) は、リ語尾が添加された語形は象徴辞としての「基本的な性格を一步離れ始める」とし、リ語尾に「象徴辞の内容を、すこしのことではあるけれども、静的で安定した、一般語的な面に向かって一段充実させる要素」としての性格があると述べている。
4. 過程形態素とは固有の音形を持たない抽象的な形態素のことで、たとえば英語の過去接辞 {-ED} に見るように、その具体的な音形がもつばら周囲の音韻的条件を通じて定まる点に特徴がある。
5. このタイプの語形については、単純反復の一種と見る解釈（森岡1987; 角岡2007）のほか、連続する同一CV拍の間に促音が介在した語形とする解釈もある（Waida 1984）。ここでは前者の解釈をとるが、これには二つの根拠がある。第一の根拠は1音節語根の語形成上の振る舞いである。(16a)に見るように、オノマトペではCV形式を単純に繰り返した語形が起らない。このため、実在しない*CV-CV型の反復形式（たとえば「*ササ」）を促音挿入の基体として位置づけることは合理的でない。第二の根拠はアクセントにかかわる次の事実である。単純反復形では「ドンドン、スイスイ、ザーザー」のように語頭音節にアクセント核が生じることが特徴だが、促音含みの「サッサ」もこの点同様の振る舞いを見せる。

6. 語幹に求められる韻律最小性の効果は一般語彙の反復現象にも観察される。並行動作を表す「ご飯を食べ食べ（話をする）」「ガムを噛み噛み（歩く）」といった動詞連用形の反復がそれである。この場合も「食べ」「噛み」のように動詞連用形が2モーラの長さを持っていればそのまま反復されるが、語幹が短く2モーラに満たない動詞では特別な過程が働く。たとえば「見る」「する」の連用形「み」「し」が反復を受けるときは、「見い見い」「しいしい」といった母音の代償延長が起こることによって2モーラ1フットの語幹（すなわち反復の基底）が作られている（影山1993: 89-90）。
7. 接尾辞付加の基底（語根）のアクセントが頭高型であるとの観察は秋永（2001: 62）の記述による。語根の頭高型アクセントは「ビクともしない」「コソとも動かない」といった慣用的なオノマトベ表現にしばしば観察される。
8. 例は大石（1988: 48）による。
9. この振る舞いについては「括弧標示の逆説（bracketing paradox）」と呼ばれる反例もあることが知られている（Sproat 1985; Pesetsky 1985）。たとえば“ungrammaticality”という派生語は、クラスII接頭辞un-を伴った派生形の外側にクラスI接尾辞-ityが外接する構造をなすにもかかわらず適格性を失わない。
10. レベル順序づけ仮説は後の語彙音韻論（Lexical Phonology）の着想を胎するものである。語彙音韻論ではいくつかの語形成レベルに区分された多層的なレキシコンが想定され、語形成とそれに対応する音韻規則がそれぞれの層に分配されていると考える（Kiparsky 1982a,bなど）。
11. このアクセント付与規則の内実は「次末モーラにアクセント核を付与せよ」というもの。有核動詞のアクセントとして一般的なパターン（次末型）を作り出す規則である。
12. アクセント付与の基盤としてのフット形成が語末から起こることについてはPoser（1990）およびKubozono（1997）において十分な証拠が示されている。また、日本語のフットが左側主要部の構造を持つことは、諸言語の韻律類型に網羅的な分析を与えたHayes（1995: 182）に指摘がある。

参考文献

- 秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典（第1刷）』東京：三省堂。
- 天沼 寧（1974）『擬音語・擬態語について』天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』3-62, 東京：東京堂出版。
- 石垣幸雄（1965）『擬声語・擬態語の語構成と語形変化』『言語生活』171: 30-36。
- 泉 邦寿（1976）『擬音語・擬態語の特質』鈴木孝夫編『日本語の語彙と表現（日本語講座4）』105-151, 東京：大修館書店。
- 大石 強（1988）『形態論』東京：開拓社。
- 大坪治治（1989）『擬声語の研究』東京：明治書院。（2006年再刊、東京：風間書房）
- 寛 壽雄（1993）『一般語彙となったオノマトベ』『言語』22（6）: 38-45。
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房。
- 角岡賢一（2007）『日本語オノマトベ語彙における形態的・音韻の体系性について』東京：くろしお出版。
- 国立国語研究所（1964）『分類語彙表』（国立国語研究所資料集6）東京：秀英出版。
- 小林英夫（1933）『国語象徴音の研究』『文學』1（8）: 1-47。
- 阪倉篤義（1966）『語構成の研究』東京：角川書店。
- 玉村文郎（1989）『語形』杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味（上）』23-51, 東京：明治書院。
- 田守育啓・ローレンス=スコウラップ（1999）『オノマトベー形態と意味ー』東京：くろしお出版。
- 那須昭夫（2007）『オノマトベ語尾の分布と相互の関係』『筑波日本語研究』12: 1-25。
- 那須昭夫（2010）『部分反復オノマトベにおける韻律写像と無標志向性』『KLS』30: 278-289。
- 南部忠明（1992）『オノマトベの構造ー形態と意味ー』田島統堂・丹羽一彌編『日本語論究3 現代日本語の研究』237-289, 大阪：和泉書院。
- 森岡健二（1987）『語彙の形成』東京：明治書院。
- 渡邊 實（1952）『象徴辞と自立語ー音と意味（一）ー』『国語国文』21（8）: 37-54。
- Allen, Margaret（1978）*Morphological Investigations*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Bauer, Laurie（1983）*English Word-Formation*. Cambridge University Press.

- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968) *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford: CSLI Publications and Tokyo: Kuroshio.
- Hayes, Bruce (1995) *Metrical Stress Theory: Principles and Case Studies*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hockett, Charles F. (1950) Peiping Morphophonemics. *Language* 26: 63-85.
- Itô, Junko (1990) Prosodic Minimality in Japanese. *Papers from the 26th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society (CLS)* 26: 213-239.
- Takehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, and Laurence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kiparsky, Paul (1982a) From Cyclic Phonology to Lexical Phonology. In van der Hulst, Harry and Norval Smith (eds.) *The Structure of Phonological Representations (Part I)*. 131-175. Dordrecht: Foris.
- Kiparsky, Paul (1982b) Lexical Morphology and Phonology. In The Linguistics Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. 3-92. Seoul: Hanshin.
- Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. [Published by Garland, 1994]
- Kubozono, Haruo (1997) Lexical Markedness and Variation: A Non-Derivational Account. *The Proceedings of the 15th West Coast Conference on Formal Linguistics (WCCFL)* 15: 273-287.
- McCarthy, John and Alan Prince (1996) *Prosodic Morphology 1986*. Ms., University of Massachusetts, Amherst and Rutgers University, New Brunswick.
- Pesetsky, David (1985) Morphology and Logical Form. *Linguistic Inquiry* 16: 193-246.
- Poser, William J. (1990) Evidence for Foot Structure in Japanese. *Language* 66: 78-105.
- Siegel, Dorothy (1974) *Topics in English Morphology*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Siegel, Dorothy (1978) The Adjacency Constraint and the Theory of Morphology. *Proceedings of the North-Eastern Linguistic Society* 8:189-197.
- Sproat, Richard W. (1985) *On Deriving the Lexicon*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Waida, Toshiko (1984) English and Japanese Onomatopoeic Structures. 『女子大文学 (外国文学篇)』 36: 55-79. (大阪女子大学英文学科)

(なす あきお 筑波大学)